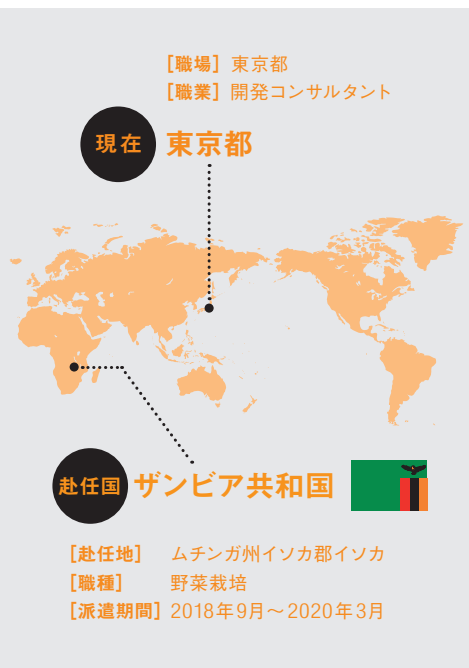
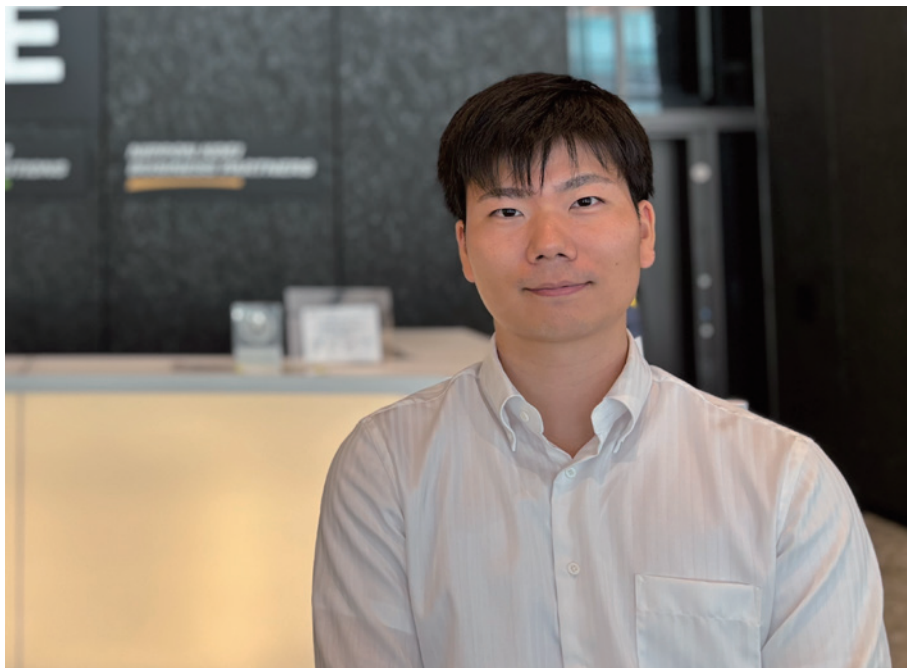




「ワクワク」を羅針盤に、 後悔しない人生を追い求めて。

江草 泰介さん 日本工営株式会社・流域水管理事業本部・地域整備部
Taisuke Egusa

開発コンサルタントとして世界を舞台に活躍中のJICA海外協力隊（以下、JOCV）経験者の江草さん。
どっちがワクワクするか？—ユニークな選択基準で未来を切り開いてきたその生き方を探ります。

揺るぎない情熱を胸に、 世界の課題に挑む

「後悔しない人生を送りたいんです」誰もが一度は抱くこの願いを、現実の行動に移し国際協力の道を突き進むのはJOCV経験者の江草泰介さんだ。現在、開発コンサルタントとして二年目を迎え、日本とスリランカ、ケニアを飛び回る忙しい毎日を送っている（*2024年時点）。スリランカでは農薬・肥料の安全・適正利用に関する支援、ケニアでは栄養改善プロジェクトと開発コンサルタントの仕事は多岐に渡る。しかも、現地では政府関係者との調整からロジスティクス業務まで自ら知識や対応力を駆使してこなさなければならない場面も多い。しかし、江草さんはこれら全てを

学びの場と捉え、常にポジティブな姿勢で与えられた使命と向き合っている。

こうした国際協力への揺るぎない情熱は、JOCVとしてザンビアに派遣され、野菜栽培の活動に汗を流した経験に根ざしている。「途上国の人々に対する見方がガラッと変わりました」JOCVに参加したことで「支援する立場にある」という一方的な思いから「共に学び、共に成長する」という意識に変わっていったと語る。そうした謙虚で直向きな姿勢が評価され、江草さんは一年目から海外プロジェクトに参画している。「JOCV活動と同じように、現地では農家の人々と触れ合ったり、屈託ない子どもたちの笑顔と出会えます。それが何よりも励みです」と生き生きとした笑顔を見せる江草さん。国際協力への強い情熱がひしひしと伝わってくる。

ザンビアでの挫折と、 再出発への道のり

JOCVへの参加は、大学時代に抱いた夢だったという江草さん。「ザンビアにやってきた当初は、高揚感に満ち溢れ、何もかもが楽しかったです」と振り返る。しかし赴任から半年後、大きな挫折を経験する。「経験豊富な現地の農家さんに、日本から来た自分が教えられることがどれほどあるのだろうかと思ったのです」農学部で四年間学んだとはいえ、実務経験もなかった江草さんは自身の無力さを痛感してしまっただけでなく、持ち前の思慮深さで「一方的に教えるのではなく、現地の人から学びながら共に改善に取り組む姿勢を持つこと、そしてそ



JOCV時代。農業事務所に配属され農村を巡回訪問、農家の人々と共に野菜栽培の改善と稲作の普及に励んだ。



帰国後「帰国隊員奨学金」を受けて大学院に進学した。研究テーマは稲作。東ティモールで実地調査を行った。



開発コンサルタントになった今「日々学ぶことばかりだが、一隅を照らす存在を目指し、国際協力の現場に携わっている」と話す。

のような交流を通じて日本に対する良いイメージを広めていくことも、自分にとって大切な役割なのではないか」と時間をかけて自分自身と向き合ったという。

挫折を乗り越え、一步前進した江草さんだったが、その活動は予期せぬ形で幕を閉じることになる。新型コロナウイルスの感染拡大により、無念の途中帰国を余儀なくされたのだ。「お世話になった人たちへ挨拶する時間もなかった」志半ばで活動を終えた悔しさは、自身の国際協力への思いをかえって強固なものへと変えていく。

無念さをバネに、帰国後は『帰国隊員奨学金事業』を活用して大学院へ進学。東ティモールでJICAとの共同研究を通じて稲作の専門知識を深めていった。その成果を活かして開発コンサルタントの道へと進む。国際協力のプロフェッショナルとして再出発を果たしたのだ。

“失敗してもいいから挑戦しよう”

江草さんは小学二年生の頃、父親に

途上国の発展に貢献したいという夢を語ったことがある。その時「もっと勉強しないとダメだ」と冷静な言葉を返されたことで、夢を叶えるためには口だけではなく、行動が伴っていないといけないと幼心に意識したのだという。やがて中高生となり、再び夢と人生について深く見つめる機会に遭遇する。それが、哲学者のルキウス・アンナエウス・セネカが記した『人生の短さについて』という本との出会いだった。セネカは「人生を短くしているのは、時間を浪費しているからだ」と説く。その真意を現実のものとして突きつけられたのが、大学四年生の時だった。

「このまま夢を追いかけることをせず社会人になったら、人生後悔することになると思ったんです」何か具体的な出来事があったわけではないが「ただただ漠然とした危機感があった」と振り返る。改めてセネカの言葉を思い出した江草さんは「失敗してもいいから挑戦しよう」と気持ちを新たにした。この決意こそが、JOCVへの参加、そして開発コンサルタントへの道を目指す原点になったのだという。

江草 泰介さん プロフィール

埼玉県出身。大学卒業後、JOCVに参加。野菜栽培隊員として活動中、新型コロナウイルスの感染拡大を受け1年半で途中帰国。帰国後は、帰国隊員奨学金を受けて東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻に進学。現在、開発コンサルタントとして活躍中。

以来、何かを決断する時は迷わず「人生を後悔しない選択肢はどちらか？」で決断しているようだ。「そうですね…結局、どっちがワクワクするか？楽しいのか？という感覚が判断基準になっているんだと思います」と、何かを思い浮かべながら間を置いて話し始める江草さん。その姿からは、節目節目で内省しながら人生を切り開いてきた生き方がうかがえる。この姿勢こそが、まさに開発コンサルタントにとって重要な素養である「総合力」の礎になっているのではないだろうか。ワクワクするかで選ぶ、といったシンプルな人生の選択基準によって失敗を恐れない挑戦が繰り返され、江草さんの行動力は育まれてきたのだ。その逞しい信念と情熱は、きっと近い将来世界のどこかで確かな実を結ぶに違いない。

江草さんへのエール！

流域水管理事業本部・地域整備部
部長

山岡 茂樹さん



「人間力」に期待したい

江草君が持つコミュニケーションを取って課題を見つけていける力は、育ってきた過程で自然と形成された彼自身の人格のような気がします。それは我々開発コンサルタントの業界でよくいわれる「人間力」そのものです。JOCVの経験値を活かして一年目から活躍。同期の中でもお兄さんの存在として周りからの信頼も厚く、これからの活躍を期待したい人物の一人です。